

かかりつけ医が実践する認知症への取り組み

CLINIC 今日と明日の開業医をサポートする ——最新クリニック総合情報誌 BAMBOO

ばんぼう

1

JAN.2017
VOL.430

ISSN-0912-8692

実践

【特集】 進化する早期発見・啓発・地域づくり活動…

地域を動かす認知症対応



© 3103jp - Fotolia.com



横手英義
横手クリニック
理事長・院長



本田英義
おゆみの整形外科クリニック
会長・院長



高見国生
認知症の人と家族の会
代表理事



上野秀樹
千葉大学医学部附属病院
地域医療連携部
特任准教授



岩佐まり
フリーアナウンサー



高橋公一
みさと中央クリニック
院長



長尾和宏
長尾クリニック
院長

長尾和宏

医療法人社団裕和会長尾クリニック院長

医療不信の記事に対しては 間違いを指摘するとともに 「医療」に対する問題提起と 受けとめる必要がある

2016年7月～10月にかけて『週刊現代』（講談社）が医療批判キャンペーンの企画を展開し、大きな反響を呼んでいる。いずれも医療不信を煽るような内容であるが、こうした記事をどのように受け止めるべきか。数多くの著書や講演会などを通じて、さまざまな情報発信を行っている長尾和宏医師に意見を聞いた。

ながお・かずひろ ● 1984年、東京医科大学卒業。大阪大学第二内科等を経て、95年、長尾クリニック開業。2006年、在宅療養支援診療所登録。無数の医師による建業で、年中無休の外来診療と24時間体制の在宅医療に従事。日本老年死協会副理事長、関西支部長も務める



週刊誌の記事に怒っても意味はない
内容を検証し間違いを正すことが大切

——最近、『週刊現代』をはじめ一部の週刊誌において「こんな手術を受けてはいけない」「こんな薬は飲まないほうがいい」といった、国民の医療不信を煽るような特集が立て続けに組まれました。こうした報道を受けて動揺している患者も多くいるようですが、この現状をどのように捉えていますか。

医療不信を煽るような一連の企画記事を掲載している週刊誌に対して、医師をはじめとする医療関係者のなかには、「けしからんメディアだ」「訴えるべきである」といった主張をされている方もいるようですが、学会発表や医療専門誌に掲載された記事ならいざしらず、週刊誌に対して感情的になつて文句を並べ立ててもあまり意味がないことだと思います。週刊誌では医療以外にも政治不信を煽るような特集を何度も組んでいますし、それに対していちいち目くじらを立てて怒るようなこともないでしょう。

つまり、週刊誌の記事というのはその程度のものだということ。所詮「売ってナンボ」の商業誌であり、部数を増やすためには読者の気をひくドラスティックな見出しをつけたり、大げさな誌面づくりをすることもあるからです。

私も一部こうした週刊誌の取材に協力をしたことがあったので、「なぜ、お前はこんな取材を受けるのか」という批判の声をもらったことがあります。理由は簡単で、患者さんに正し

い情報を伝えたかったからです。実際、間違っ
たコメントは1つもなかったと思いますよ。見
出しは編集部が勝手につけていますが、週刊誌
なんてそんなもの。無視したり、怒つたりする
のは間違いであり、患者さんに誤解を与えない
ために、その内容を検証したうえで、間違つて
いる情報についてはきちんと指摘することが、
医師の役割ではないでしょうか。

なぜ医療不信の記事がウケるのか その根底にあるものを受け止めよ

——手術の選択や薬の使い方など、その内容
は多岐にわたりますが、『週刊現代』で取り上
げられている記事の内容についてはどのような
感想を持たれていますか。

10回ほども行われているのですべてに目を
通したわけではありませんが、見た限りでは行
き過ぎた記事があった一方で、「当たらずとも
遠からず」というものも多かったと感じていま
す。だからこそ誤解を生まないように取材に協
力したのですが……。

このキャンペーンとも言える一連の医療不信
を煽る特集については、その内容の検証と間違
いの指摘はもちろん重要ですが、それ以上に医
療者が考えないといけないのは、こうした医療
不信を煽るような特集がなぜ何度も組まれたの
かということ。週刊誌が医療不信の特集を連続して行ったの
は、読者からの反響が大きく、それによって部

数が大幅に増えているからでしょう。つまり、
「もっと取り上げてほしい」という読者の要望
があったということ。医療界としては自分
たちの提供している医療に対して、国民の多く
は不信感を持っているという現実を受け止めな
ければならないと思います。

仮に週刊誌の記事を読んで、治療法の選択を
変えたり、服薬を中断したりした患者さんがい
たのであれば、それは医師よりも週刊誌の記事
のほうが信用されているということ。この事実
に対して怒るのではなく、その医師はそれだけ
患者さんから信用されていないのだと真摯に受
け止めるべきでしょう。

少し前に医療を否定した「近藤誠理論」が社
会的にクローズアップされました。私は『医
療否定本』に殺されたいための48の真実（扶桑
社）、長尾先生、近藤誠理論のことが間違つて
いるのですか？（ブックマン社）といった自著
のなかで、この「近藤誠理論」の間違つてい
る部分について指摘してきました。患者さんを守
るためにも「近藤誠理論」のうち間違つてい
る部分にはしっかりと説明していかなければなら
ないからです。

一方で、あれだけ多くの国民が反応した「近
藤誠現象」については素直に受けとめて検証し
なければならぬと考えています。現代のがん
医療に対して国民が不信感を抱いていることの
証左であり、この現象について医療者は謙虚に
受け止めなければならないということ。今
回の週刊誌による一連の医療不信特集も同

じです。『週刊現代』の記事の内容の間違いを
指摘すると同時に、「週刊現代現象」から見
えるものや学ぶべきものを考える必要があるとい
うことです。一連の特集記事では、薬の使い方
や手術に対する不信感を煽つていますが、これ
はすなわち国民は手術や多剤投与などに対し
て、「おかしいのではないか」と感じているか
らでしょう。医師をはじめとする医療者は今回
の「週刊現代現象」を、国民からの警告と受け
止めるべきだと思います。

——このたび、新たに『薬のやめどき』『痛くな
い死に方』ともにブックマン社という2冊の
本を上梓されました。長尾先生は数多くの著書
をお持ちですが、これだけの本を書かれる理由
はどこにあるのでしょうか。

繰り返しになりますが、患者さんに正しい情
報を伝えることにつきます。今回新しく出す2
冊の本のなかでは、『週刊現代』のことについて、
良い点も悪い点も述べていますし、記事の誤り
についても指摘しています。1つだけ例を挙げ
ると、多剤投与に対する警告に関してはいいこ
とだと思つています。高齢者の多剤投与につ
いては1つもいいことはいからです。

私の著書は医学書ではありませんが、これま
ですべて臨床経験に基づいて正しい情報を患者
さんに伝えることを目的に書いてきたもので
す。週刊誌の記事に怒るのではなく、正しい情
報を伝えていくこと、そして今回の現象を受け
止め、信頼される医療のあり方を考えることが
重要だと思つています。